

【教材の進め方について】

I. 教材実施に当たっての留意点

この教材は、子どもが経験や能力・知識などを有していることを評価するものではありません。それらについての自分自身の心の状況を、正しく判断できているか＝自己洞察能力を評価・トレーニングするための教材です。子ども自身が、「できない」や「知らない」などの否定解答をすることに、抵抗を示す場合もあるかと思われませんが、その際は、能力や知識の有無が問題なのではなく、本当のことを正しく伝えられるか、が大切なのだ、と教えていただければと思います。

II. 解答の判定について

子どもが記した解答の妥当性については、いくつかの方法で確認が可能です。能力については、その場でやってみてもらえる課題(漢字を書く・英語を言う等)は、実際に可能かどうかを確認できます。知識については、「知っている」と解答した場合は、その知識内容を述べてもらいます。その際、もし知識内容が誤りであっても(例:クリスマス・イブは何月何日?→12月25日)、子どもがそう確信していたのであれば、自己洞察としての「知っている」という解答は妥当と判定されます。経験や所有・存在は、真偽の判定が困難な場合が多いと思います。家族の方などに確認できる場合以外は、ある程度、子どもの“表明”を信じるしかないと思います。知識における誤信念(間違った知識)と同様に、自分の経験などに関する、記憶違いに基づく解答も、自己洞察としては妥当と判断されます。

III. 解答に対する対応について

子どもの解答が、事実と対応していると思われる場合は、「ふむふむ」と聞いてあげたり、その内容をテーマにおしゃべりをするなどしていただければ良いかと思えます。子どもの解答が、事実と異なっている場合は、子どもに、解答と事実との非対応を指摘して、妥当な解答への変更を促す必要があります。(例:「知識」の課題で、「知っている」と解答しているのに、知識内容を答えられない→解答を「知らない」に変更)

また、課題を行っている場面で、子どもが質問の意味を問いただしたり、事物や事柄の説明を求めたりした場合は、できるかぎりの説明を行って、それを基に解答してもらうと良いと思えます。この教材の目的からすると、解答を判断するために、そのような質問をしてくれることこそが、すでに、自己洞察の高さを示唆するものであり、教材を進める中で、このような「情報収集態度」を育てて行くことができればと考えています。

IV. 解答の選択肢について

○経験・所有・存在・能力領域における「わからない」という解答について

自分自身について、はっきりと判断ができない、という場合や、質問の意味が把握できない、という場合は、「わからない」という解答が、妥当と判断されます。安易な Yes-No に流されず、一定の自己洞察を経た「わからない」という態度の表明は、コミュニケーション能力として、非常に大切だと考えられます。

○知識領域における「知っていると思うけど自信がない」という解答について

「知識」についての判断は、大人でも微妙で難しい問題です。はっきり「知っている」「知らない」と断定できるものよりも、条件つき解答となることが多いと思われれます。「～かなあ」「～だと思う」など、自分の知識についての“確信の度合い”を付帯させることは、相手からの誤解を避けるために不可欠です。一方、発達障害の子どもも多くは、知識についての確信の度合いを洞察すること、それから、その度合いを言語的に表現すること、が苦手です。そのため、断定的に判断を述べてしまうことが多く、コミュニケーション上のトラブルの要因になっています。「知っていると思うけど自信がない」は、高度な自己洞察能力が求められる、難しい選択肢ですが、まず、このような判断(もしくは言語表現)の存在に触れることから、徐々に、日常場面で運用できるようになってもらえれば、と考えています。

≪実施に当たっては、子どものさまざまな解答・反応が予想され、それらへの対応についても、必ずしも、判然と行えない場合が多いかと思われれます。ひとつひとつの解答の正誤を、厳格に求めるよりも、プリントを通したコミュニケーションの中で、自己洞察に対する気づきを、少しずつ高めていただければと思います。≫